

SHOW HEY シネマルーム



Data
監督:カン・ウソク
原作:ユン・テホ
出演:チョン・ジェヨン/パク・ヘ イル/ユ・ジュンサン/ユ・ ヘジン/ユ・ソン/キム・サ ンホ/キム・ジュンベ/ホ・ ジュノ

👁️👁️ みどころ

やっぱり韓国映画はすごい！心の底からそう実感出来る新作が登場！横溝正史ばりのおどろおどろしいイメージにピッタリのこの邦題は、原題の『苔』よりグッド。

村人たちのこのよそよそしさはナニ？今この村で次々と殺人事件が起きるのはなぜ？そして、30年前には一体ナニが？この村は理想郷だったのではなかったの？2時間41分の怒濤の展開にきっと息を飲むはずだ。

『黒い家』は日本版から韓国版ができたが、『黒く濁る村』については韓国版から日本版の企画を期待したい。

なぜ、こんな迫害と弾圧を？

本作は2時間41分の大作だが、原題の『苔』では何の映画かさっぱりわからない。しかし、『黒く濁る村』という邦題を見れば、きっとミステリー風？そこでチラシを読むと、「30年の歳月中、欲望の果ての人間の哀しみを描く、極限のミステリー」と書いてあり、「韓国で340万人動員の大ヒット！」らしいから、きっと大胆な問題提起作。そう思ったとおり、冒頭からこれでもかこれでもかとなり出される、チョン・ヨンドク刑事（チョン・ジェヨン）による宗教家ユ氏ことユ・モクヒョン（ホ・ジュノ）に対する「迫害」と「弾圧」はものすごい。こりゃ、治安維持法があった戦前日本における、特高警察による日本共産党員に対する弾圧や拷問と同じ？しかし、チョン刑事はなぜこんなにユ氏を迫害・弾圧するの？

本作冒頭のテーマはまちがいないけれど、しかし、この2人はタイプこそ正対だが、求

めているものはひょっとして同じ？チョン刑事によるユ氏への「迫害」と「弾圧」がひとしきり終わった後、チョン刑事がそんな視点を見せ始めるので、こりゃ興味津々・・・。

2人が目指した理想郷とは？

最初は少し怪しげに見えていたが、ユ氏の布教活動を見ていると、人間の罪深さを説き、善き行いをなすべきと解き続けるユ氏は決して麻原彰晃タイプではなく、まちがいなくイエス・キリストタイプ。だって、チョン刑事からどんな迫害を受けても、ユ氏の周りに集まる人々はもちろん、ユ氏に迫害を加える人々まで最後にはユ氏の「信者」になってしまうのだから。キリストの力を恐れたローマ帝国はキリストをはりつけにすることによって逆に永遠の命を与えてしまったが、チョン刑事はそんなユ氏の力を利用しようとしたから、少なくともローマ帝国のリーダーよりは利口。つまりチョン刑事はユ氏のどんな人でも「たぶらかしてしまう能力」を率直に認めた上、その力を利用して一種の理想的な村をつくらうと計画したわけだ。

「科学的社会主義」といわれるマルクスやエンゲルス以前には、「空想的社会主義」といわれるユートピア思想が存在した。そんな思想を実践しようとしたのがフランスのシャルル・フーリエやイギリスのロバート・オーエンだが、チョン刑事はユ氏のそんな力を利用して、それと同じような「理想郷」の建設を目指したわけだ。「五族協和」の名のもとに、かつて大日本帝国が建設を目指した満州国はあえなく崩壊したが、さてユ氏とチョン刑事が力を合わせて建設を目指した理想郷は？

一気に30年経過！これが同じ俳優？

いかにも韓国映画らしい(?) 迫力ある暴力・暴行シーンが続いた後、やっと字幕が流れてくるが、ここから始まる次のストーリーは一気に30年後。原題の「苔」をあちこちに植えつけたという、邦題の「黒く濁る村」を舞台に、はげ上がった前頭部に白髪の爺さんが登場するが、これが村長らしい。なるほど、あの理想郷の誕生から30年を経て、今はこの爺さんが村長をつとめているわけだ。

ところで、70歳を超えたと見られるこの爺さんは一体ダレ？誰もがそう思うはずだが、物語が進展する中、これがあの大声で怒鳴りちらし、暴行の限りをつくしていたチョン刑事の30年後の姿だと知ってビックリ。さらに驚くのは、チョン刑事と30年後の村長のいわば2役を演じたのは、何と『彼とわたしの漂流日記』(09年)で若々しい口ピンソン・クルーソー役(?)を演じていたチョン・ジェヨンだということ。30歳も年が違えば2人の俳優を使い分けるのが普通だが、チョン・ジェヨンをとコトン信頼した『シルミド』(03年)のカン・ウソク監督は、本作ではあえてチョン・ジェヨン1人で！

きっかけは1本の電話から

大竹しのぶ主演の『黒い家』(99年)は「自殺でも保険金はおりるの?」と電話で問い合わせるシーンから始まった。そしてこれは、韓国版『黒い家』(07年)も同じだった。しかして、「黒く濁る村」を舞台とした、横溝正史ばりの(?)おどろおどろしいストーリーも、ユ・ヘグク(パク・ヘイル)に対して女性の声で「お父さんが亡くなりました」と伝えられるところからスタートする。幼い頃に父と別れ、この村に何の縁もゆかりもないユ・ヘグクは、父の葬式だけは挙げようと思って村に戻ってきたわけだが、死亡診断書もなく死因も特定されないままの葬式に、ソウル育ちの若者ユ・ヘグクが納得できないのは当然だ。

今や世界的大女優となった章子怡(チャン・ツイイー)のデビュー作となった張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『初恋のきた道』(00年)は、父親の葬儀のために故郷に戻ってきた息子の回想録として、父親と母親の「初恋のきた道」が語られたが、その映画では帰郷した息子は全ての村人から尊敬と歓迎の気持で迎えられていた。しかし、どうも「黒く濁る村」でのユ・ヘグクは、招かれざる客のよう。会話を聞いていると、まるで「いつソウルに帰るのか」とせかされているようだ。俺だって、いつまでもこの村に滞在したいわけではない。そう思いつつユ・ヘグクは最低限の義務を果たそうとしたが、せめて死因くらいははっきり説明してもらわなければ。

そんなユ・ヘグクを村長や村人は受け入れたが、明らかに迷惑顔。こりゃ一体ナニ?そして、「この村にしばらく滞在します」と宣言して、ユ氏が住んでいた家の中でいろいろ古い資料を発見していくにつれて、ユ・ヘグクの疑惑はどんどん広がっていくことに。その「疑惑」とはもちろん、「父親は誰かに殺されたのではないか?」ということだが、そんな恐ろしいことを、こんな小さな村の中で一体誰が?そして一体なぜ?

村長の家は安土城?『忍びの者』類似のトリックとは?

「天下布武」を目指した織田信長が当初斎藤道三の居城であった稲葉山城を岐阜城と改称して居城としたのも、その後巨大な安土城をつくったのも、支配者たる者は一番高いところから天下を見下ろす必要があると考えたため。今でも超高層タワーマンションの最上階に人気があるのは、庶民でもそんな感覚を味わいたいためだ。そんな視点で「黒く濁る村」の一番高いところに村長の自宅がつけられているのを見ると、村長が織田信長を目指していたこと(?)がよくわかる。

村山和義作の『忍びの者』(62年)は、百地一族と藤林一族との対立を軸として展開する面白い「忍者モノ」だったが、実は百地一族の親分である百地三太夫と藤林一族の親分である藤林長門守は同一人物であったうえ、その本拠地が地下道で結ばれていたというトリックが秀逸だった。しかして本作にも、それと似たようなトリック(?)が登場するか

ら、それに注目！



2010年11月27日(土)より、梅田ブルク7、シネマート心齋橋、T・ジョイ京都にて公開！
2010年12月4日(土)より、シネ・リーブル神戸にて公開！

日本では大逆風だが、韓国の検事は？

大阪地検特捜部の前田検事による証拠改ざん事件は、3人の検事の起訴という大変な事態となった。私は去る10月20日に開催された大阪大学法曹会による新64期司法修習生の合格祝賀会に出席し、いろいろ話を聞いたが、そこだけでも検事志望者が激減しているサマがくっきりと。前田検事は「割り屋」として能力を発揮したらしいが、それは裏を返せば強引な取調べで自分の描くストーリーに被疑者の供述を合わせるということ。その大前提は客観的な証拠との整合性だが、あまりにも自分のストーリーに固執してしまうと・・・。

本作冒頭におけるチョン刑事の取調べをみていると、前田検事以上に無茶苦茶。また、呼び出したユ・ヘグクに対して、検事にあるまじき言葉で追及するパク・ミンク検事(ユ・ジュンサン)の姿をみていると、韓国では検事も刑事も無茶苦茶？つい、そう思ってしまふ。日本では今回の事件によって、「取調べの可視化」の議論が急速に進むはずだが、別に可視化しなくても、検事の取調べ状況をICレコーダーで録音しておけば、効果は同じ？本

作で頭のいいユ・ヘグクはそれを実践し、そのレコーダーを証拠としてパク検事の上司に提出したから、たちまちパク検事はソウルから地方に飛ばされてしまうことに。前半では「黒く濁る村」を舞台とした本題とは別に、ユ・ヘグクとパク検事とのそんなユーモラスな(?)対決が描かれるから、これによってユ・ヘグクとパク検事は天敵になったはず。ところがその後の展開は・・・?

多少ワルでも有能なやつは有能。もっと言えば、特捜であれくらいの強引な取調べができるからこそ、「割り屋」としていい仕事ができている。そう考えるのも一理ある。その結果、村で危地に陥ったユ・ヘグクはそれを実践し、以降何かとパク検事の助力を求めることに。村で展開される物語がすべて黒くよどんでおり、おどろおどろしいものであるだけに、ユ・ヘグクとパク検事という2人の若者が織りなすケンカと交流はさわやか?

3人の脇役に注目!

本作は中盤から後半にかけて、村の民である、表面上はいい人のようにだが、裏では殺気を隠して暮らすチョン・ソクマン(キム・サンホ)、陰湿そうでおこりっぽいハ・ソンギョ(キム・ジュンベ)、いつも村長に付き添い使い走りをしている、一見コミカルだが複雑な内面をもった男キム・ドクチョン(ユ・ヘジン)たちが大きな役割を果たすが、ユ・ヘグクとの初対面の場面では別段何の確執も生じていない。もちろん、それは村長とユ・ヘグクの間においても同じだ。

しかし、探偵ごっこのようなユ・ヘグクの行動が続く中、彼らの気持のなかにユ・ヘグクに対する確執が生まれ、次第にそれが敵意に……。映画中盤のハイライトはこの3人の脇役とユ・ヘグクとの対立だが、本作の素晴らしさは3人の村人を何とも個性豊かな俳優が演じていること。ハンサムで演技が上手ければ主役は誰でもつとまるが、映画を面白くするのは個性的な脇役の存在。山の中へ逃げるユ・ヘグクをカマをもって追いかけるチョン・ソクマン、いかにも楽しそうに(?)ユ・ヘグクをあの世に送ろうとするハ・ソンギョ、そして表面上は完全に村長に服従しているにもかかわらず、心の中に複雑な思いがあるキム・ドクチョンを圧倒的な迫力で熱演する俳優たちは、いずれも韓国映画になくてはならない存在だ。

プレスシートではユ・ヘグクのことを「澄んだ瞳の奥に潜む執拗なカリスマ」と評しているが、本作でそんな魅力を発揮できるのは、これらの脇役が素晴らしい役割を果たしているからだということをしっかり確認したい。

紅一点は、後半からラストに向けて存在感を

本作の紅一点は、村で雑貨店を営む女性イ・ヨンジ(ユ・ソン)、しばらく滞在すると宣言したユ・ヘグクのとりあえずの宿泊先となったのがこの雑貨店だが、そこでユ・ヘグクが見た異様な姿とは?そもそもこの村には女っ気がないのが不自然だが、なるほど「黒く

濁る村」にはこんなぞっとするシステムが・・・？

本作前半ではイ・ヨンジの出番はほとんどなく、コトが終わった後、スカートをめくり井戸から汲んだ水で股間を洗うシーンが目立つくらい。一流の女優がこんなシーンだけで出演をOKするの？いやそんなはずはない、と思ったとおり、後半からラストにかけて、このイ・ヨンジの存在感が増していく。30年も経ったから、村長の頭もあんなにハゲかつ白髪になったわけだ。イ・ヨンジが今でも若く美しいのは少し不自然。しかしまあ、そこは女優のことだから大目に見たい。ところで、小さいころのことを覚えているのは何歳くらいから？その答えは難しい。なぜなら、強く印象に残っていることなら、小さくても鮮明な記憶が残るからだ。

手に汗握るクライマックスは？

本作は松本清張原作、野村芳太郎監督による邦画の最高傑作『砂の器』(74年)に見るような犯人捜しのミステリーではないが、パク検事がユ・ヘグクの要請と検事としての捜査によって大挙して村に踏み込んだことによって、物語は一気にクライマックスへ。

スタートからちょうど2時間経ったところから、スクリーン上には再び30年前の理想郷の様子が登場する。それを見ていると、ユ氏が考えていた理想とチョン刑事が考えていた理想は全く違っていたこと、チョン刑事はユ氏の力を利用して自分の考える理想郷をつくらうとしていたことがよくわかる。さて、チョン刑事が描いていた理想郷とは？それは、ユ・ヘグクからの要請によってやっと重い腰をあげたパク検事が、チョン刑事の過去を調べていく過程の中で明らかになるからこれに注目！それにしても一介の刑事にすぎないチョン刑事がなぜそこまでの大理想を描けたのかが不思議だが、その能力をホントに善き道に使ってれば、ひょっとしてホントの理想郷がつけられたのでは？

それはともかく、ここでの最大のポイントは、かつて起きた理想郷の中で祈祷院での集団殺人事件という大事件。その秘密の鍵を握るのは、もちろん村長とユ氏の2人だ。さて、その責任はどちらに？それをめぐって、パク検事とユ・ヘグク、イ・ヨンジの前で展開される、村長との論争はまさに本作のクライマックスだ。証拠による事実の認定。それが何より大切だが、そんな論争の中で30年間も村長らと行動を共にしてきたイ・ヨンジが明らかにする事実とは？そしてまた、それによって追い込まれた村長が語る真実とは？それは、しっかりとあなた自身の目で。

2010(平成22)年10月23日記